

## C-52 立体成形に対する布地の適応性について（第3報）

戸板女短大 香取智恵子

目的 前回までに、張力とアイロンによる布地の曲面成形に対する布地の適応性を検討した。その要旨は、①立体曲面への成形作業が標準化しにくいこと、②評価法が困難であることから、発想を転換して、一边を逆V字形に引き寄せ生じた自然曲面を、アイロンで平面化して成形できる逆V字の最大角度をもつて、布地の立体曲面成形への適応性指数とするすることを提案した。前回では、この評価法の形状効果に影響されない布地の固有値を得るための寸法条件を検討したが、今回ではこの測定の再現性、ちらばりの標準偏差、常温常湿での自己回復の放置時間特性、その他を調査し、布地間の特性の差を有意差として扱える本測定法の確度の限界を検討した。

方法 測定方法については前回と同様であるが、再現性を見るために試料は $20 \times 20$ cmとし、1種類につきたて、バイアス方向のものを1日測定分各々5枚とし、7日間の枚数を準備した。この試料をアイロン成形のためにその温度、水分率、所要時間等を一定とし、7日間連続して測定したもの自然放置し、各々7日間の観測を行った。

結果 測定値の再現性は、標準偏差の測定値に対する比率で5～7%が得られ、布地の性質を把握することが充分可能と考えられる。また自然放置による自己回復の時間経過にかなり明瞭な規則性が認められた。